

カツオ 中西部太平洋

Skipjack, *Katsuwonus pelamis*

管理・関係機関

中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC)

最近一年間の動き

中型・小型の竿釣りによる 1~6 月における小笠原・伊豆・房総沖での漁獲量は 1.3 万トンで、豊漁だった昨年よりも少なかった。その後 7 月~8 月には常磐沖・三陸沖で漁獲は好調となったが、9 月~10 月には低気圧や台風の通過により漁獲量は伸びなかった。

わが国の大型竿釣り船は 1990 年代初頭以来約 40 隻が稼働してきた。しかし刺身向け冷凍カツオの価格が長期にわたり低迷したこと、夏季のビンナガ漁において 2004 年および 2005 年の 2 年連続の不漁だったこと、さらに燃油の高騰したことから、経営が悪化し、2006 年の初頭には約 10 隻が廃業もしくは休漁に追い込まれた。

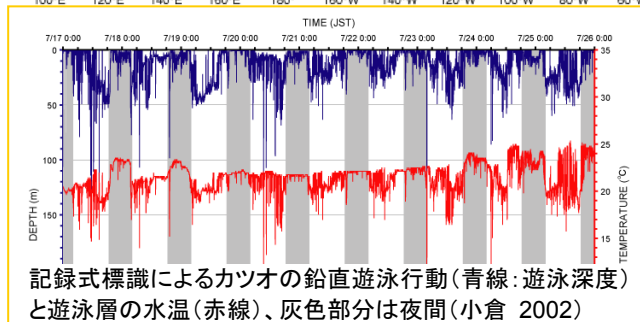
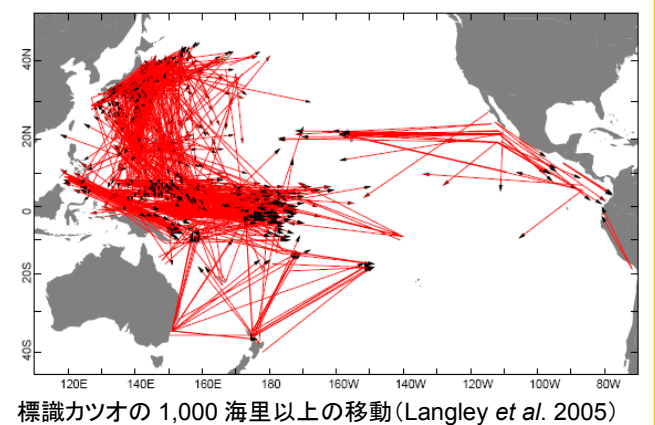
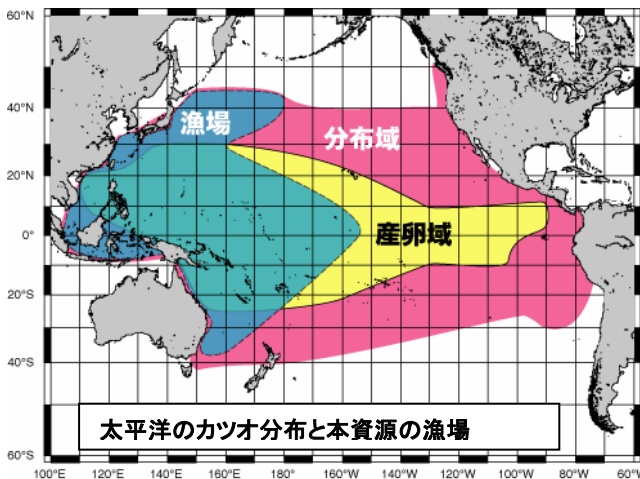
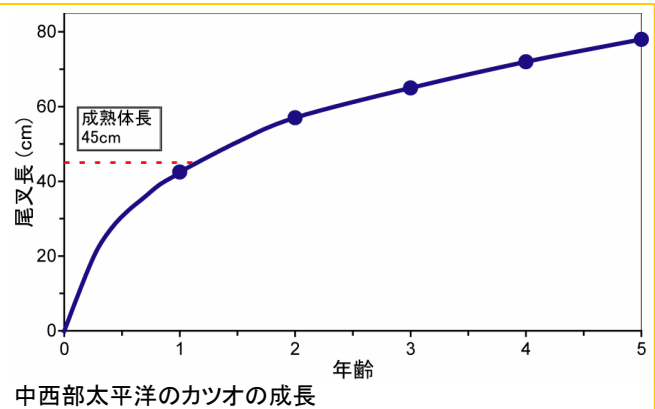


生物学的特性

- 寿命: 6 歳以上
- 成熟開始年齢: 1.5 歳
- 産卵場: 表面水温 24°C 以上の海域
- 索餌場: 表面水温 15°C 以上の海域
- 食性: 動物プランクトン、魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海鳥類など

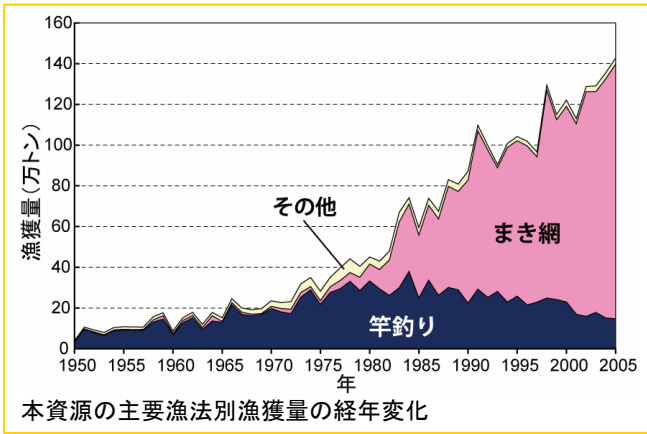
利用・用途

刺身・たたきによる生食、缶詰や節原料



漁業の特徴

近年の漁獲量は約 120 万トン前後で、そのうちまき網漁業が中心で 7 割以上、竿釣り漁業が約 2 割 (その約半分が日本船)、その他の漁業が 1 割弱を漁獲する。日本周辺の中心的漁場の常磐・三陸沖漁場 (漁獲量 10 万トン前後) でも 1980 年代後半からまき網操業が増加し、年により漁獲量の半分近くを占める。



漁獲の動向

戦後、日本の竿釣り漁業等の漁場拡大で漁獲量は徐々に増大し、1960年代後半には20万トン、1970年代後半には40万トンに達した。その後、さらに熱帯水域のまき網漁業の規模拡大で急増し、1990年代には100万トン前後が漁獲され、1998年からは120万トン前後で推移し、2005年には過去最高の143万トン(暫定値)に達した。このうち北緯20度以北の日本近海での漁獲量は1970年代以降、15~20万トンで安定している。

資源状態

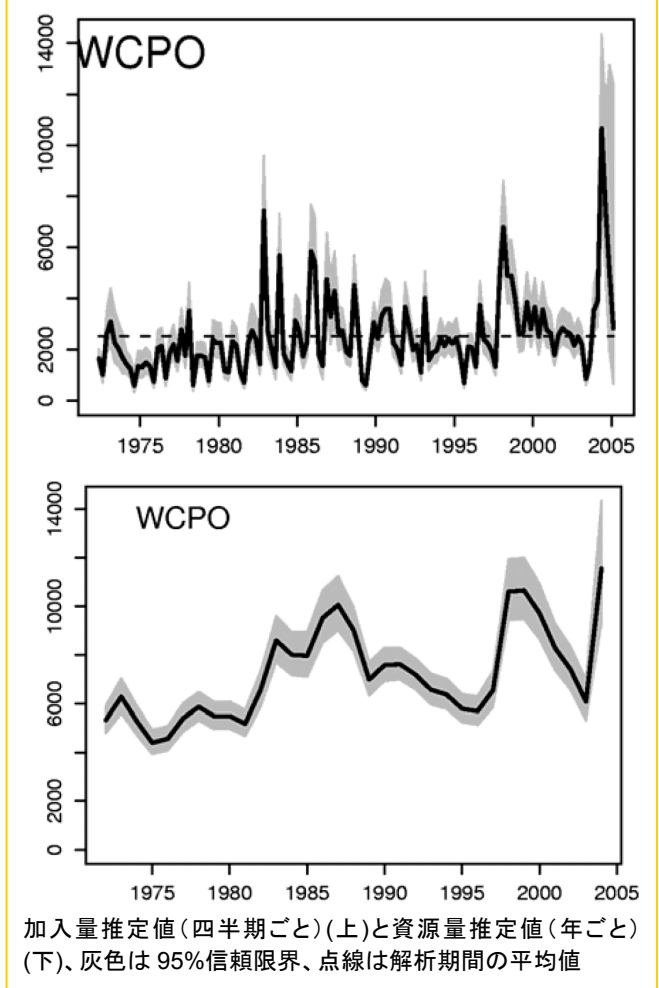
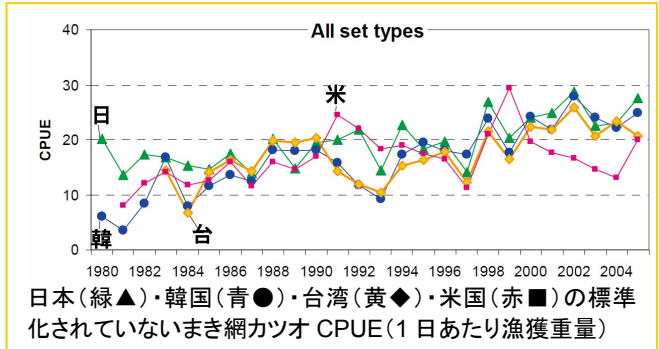
漁獲による死亡の割合は増加傾向にあるが、自然死亡に比べて低い値に留まっている。新規に資源に加わる加入量は大規模な海洋変動現象のEl Niño(エル・ニーニョ)現象に続いて多くなる傾向にあり、1980年代中期から高い水準が続いている。資源量の変動は加入量による部分が多い。最近の資源量は長期的な平均値より高い水準にあると考えられる。漁業の資源利用の割合は増加傾向が見られ、最近年で14%となっている。現在の漁獲率はMSYレベルより下で、過剰漁獲ではなく、資源量もMSYレベルより上で、乱獲状態ではないと考えられる。

管理方策

本資源は2005年から日本も加わってWCPFCが管理している。漁獲率は資源が持つ生産力より小さいと考えられる。漁獲量は2004年に過去最高を記録したが、加入がこれまでの長期的な平均を下回らなければ持続可能と考えられる。なお、2003年のWCPFC準備会合では、メバチ・キハダ小型魚混獲減少のために過剰な漁獲能力の削減の決議が採択され、カツオ漁獲量の動向に影響すると考えられる。

資源管理方策まとめ

- 本資源はWCPFCが管理
- 漁獲率は資源の生産力より小さい
- 加入が長期的な平均を下回らなければ持続可能



資源評価まとめ

- 最新の資源評価は2005年のWCPFC科学委員会で実施
- 漁獲率はMSYレベルを下回り、過剰漁獲でない
- 資源量はMSYレベルを上回り、乱獲状態でない

カツオ(中西部太平洋)の資源の現況(要約表)

| | |
|---------------|-------------------------|
| 資源水準 | 高位 |
| 資源動向 | 横ばい |
| 世界の漁獲量(最近5年) | 113~143万トン 平均:130万トン |
| 我が国の漁獲量(最近5年) | 28~33万トン 平均:31万トン |